

門 18 特
號 1833
卷 61



非_二公之德威不能使二子盡其材術也自非二子之材術不能使公逞志才異域也嗚乎風雲之於_二龜虬維其氣運哉維其時勢哉

五

五

享和元年辛酉二月

廣福王府侍臣

舍人親王後胤大藏卿從二位賢忠六代孫

青水造酒清原宣久



四

九天壤之間有非常之物則
必有非常之應焉
風之從虎不其然乎
其於人亦復然故世有勲業非常
之君則必有傑然非常之臣

焉蓋氣運之與時勢不得不
然也。古昔豐太閤起於布衣
馳騁列國于矛戈之中。攫控
群雄乎鼓鼙之間也。義士
悍將為之爪牙而能垂允常
之勲業矣。若夫加藤清正英

武拔萃出群行兵之妙雖
吳良平或不過之。小西行長
次之。亦同貴寵及公之討朝鮮
命為先鋒。分兵兩道深入絕
邈之域。破堅降強。猶拉朽矣。
乘席卷之功。如入無人之境。鮮

軍戒懼鼎竄呼為鬼將自
非傑然非常之士豈得如此
哉行長雖亦同勞績然而妬
忠良爭威權無有報主之實
惜夫使之知由理義其亦遽
出于清正之下乎要之自

繪本古圖記六篇並目錄

卷之七

殿下將三河吉良語

冬長殿下將場幸陣乃圖

兵士為山中又稱なる圖

雪中放鷹の圖

冬長殿下治治乃圖

殿下波石利休を女話

殿下東山の志村治乃圖

浪若利休を渡り給ふ圖

利休茶室の圖



序之二

孝臣殿下大御所 清路

利休居士己今之語

利休世と稱する國

利休居士の像

三俊之徳寺に列る國

二之卷

秀吉云 但馬群臣并宅話

秀吉云 下邳に銀錢を賜ふ國

戸川某秀吉と答ふ負む國

利休之幽冥茶室の内又現る國

朝鮮宮使來朝之語

朝鮮人來朝聚樂城に列る國

朝鮮征伐評議之語

浪浪海島の國

秀吉云 法ある寺に清路の國

秀吉云 諸候と集り朝鮮

征伐を議し終る國

朝鮮渡海定先評話

倭勢浦に艦遊を制る國

先兵糧と朝鮮に入る國

右國遺書琉球語

日圖

坂の町人茶屋の御幸の図

三三三卷

備大御平軍旗紫紫話

日圓

達家の二士長月出立の圖

左衛門右衛門名護屋陣中結構の圖

朝鮮渡海小西外長遠諸將話

左衛門紫紫河下白の圖

朝鮮渡海の諸將陣中

折紙を渡すの圖

瀧大將名護屋を築く

朝鮮と渡海の圖

小西外長接廻りの圖

小西外長隔谷山浦登萊話

外長谷之浦の城と落民の圖

加茂清正と坂名破伏兵話

牛と猪と武者と見えて落首とまゐる圖

清正仁智朝鮮の庶民と伏する圖

清正と坂名朝鮮軍を破る圖

酒と試みて諸軍を飲ませ

戦う事と休むの圖

清正府内城の御幸

集書
新治昔傳を新る國

仁之卷

小西外長簡尚州地話

小西が勇長本戸作右衛門治世と凌ぎ

龍山地乃攝ふ龍を國

外長が籠下の兵朝鮮の付候と

多流して折殺は國

外長小崗州より度強人を破る國

小西外長瑞忠州地話

申候人倭兵の到ると思ふ民間の

旗亭より張る國

外長が龍と城て忠州と龍を國

美賀荒河田の二士合汝物と討つ國

小西加藤論先陣話

朝鮮王都城を用て平壤城破る國

加藤清小西が士率の狼藉と制する國

清外長先陣と率入國

小西外長入王城話

外長王城の東大門より到る國

本戸作右衛門水関を破る國

加藤清正勝龍津話

清正龍津川の邊に月日國

曾根孫六水鏡の岸の兵船と奪取の圖

五之卷

加茂清正源入水道話

日國

清正威と示し御民よるの奉内とあしむ國

加茂清正海江倉摺禱克滅話

清正禱克滅と戦ふ國

並に今右邊門禱克滅と捕ふ國

加茂清正摺西を子話

日國

清正朝鮮乃西を子と安んじよ送る國

加茂清正討元良哈話

日國

清正大石塔にて元良哈の城と凌ぐ國

美田孫を清元良哈と戦死の國

清正海州より富士を攻むる國

小西外長渡徳津話

申碯いと渡つて小西と逐ふ國

小西外長乃大明話

外長申碯が平と麻を以て國

小西外長書と朝鮮乃城中よ送る國

六之卷

朝鮮王用平壤城話

柳川調信德怒命と仁王と今八國

和軍の多銃解兵を懼しむる國

朝鮮人疾討日本勢話

日本勢敵と退く大日以後と國

平壤城城保唐時新軍話

平壤城城乃國

加后九馬友接新軍の國

加后黨争と戦功を論する國

李宗臣用亀甲船破日本勢話

日 國 二葉

豊右衛門名護屋津陣乃被勢話

名護屋津中漢網の國

鮮真と割て右衛門長陣の旁と慰め給ふ國

石田三成示謀乃九近話

日 國

七之卷

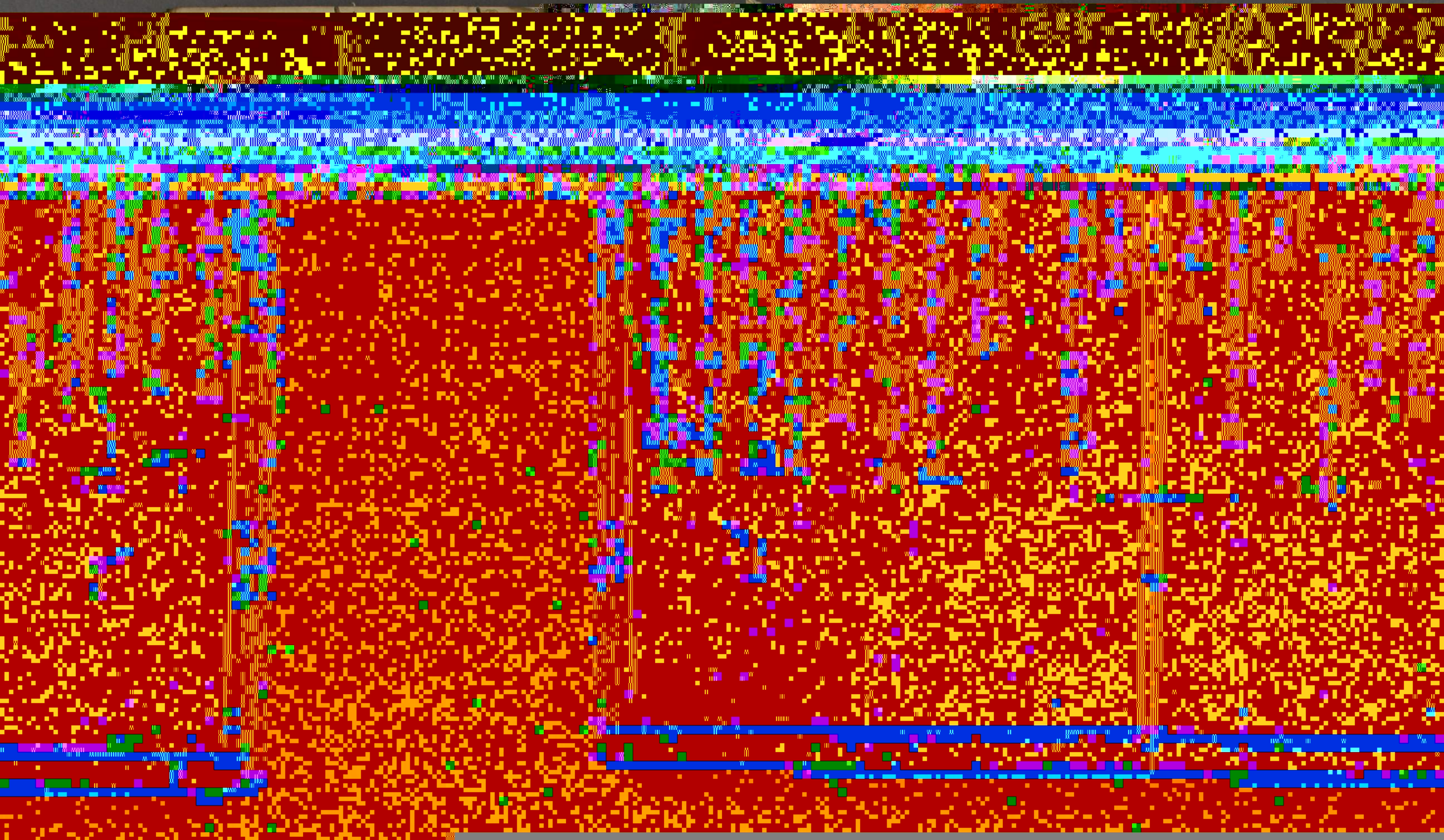
日本之加勢後海朝鮮國話

石田三成増回大右衛門と信條と渡る國

大廳薙御話

大廳及例の國

右衛門大廳と名き給ふ國



黒多永政澄系が先陣と助る國

小豆川九箇女播磨の勇將

李如松が大軍を破る國

小豆川が家臣安上又即去清

李如松と刺んとる國

加茂清正彌志摩尚繁形勢話

白鳥軍威名朝鮮又震る國

震天雷の火炮和軍と劫る國

彌志摩尚繁瓦平山破鮮軍話

由洛勘に即衣笠越え清と敵る國

九之巻

加茂清正敵令山橋中城話

藤本依直強勇の國

本村又義元直家が伏兵を破る國

清正勇力元直家と討る國

加茂清正お救虎話

日圖

加茂三條義勇將血將話

明の番大受和軍の畫(一)

頼宗を焼く國

加茂三條義勇流石城破る國

安南合戦之話

日 國

小西行長書信沈惟敬話

日 國

日本勢燒王城話

沈惟敬再び和軍の陣中へ来る國

朝鮮乃高買日本人を蕪殺す

王城の市に交易する國

日本勢王城を燒て釜山浦へ退く國

十三卷

明使渡海日本両方子還朝鮮話

老古閣龍臥松と渡りて明使と食座(終六國)

朝鮮の両方子許され都へ歸る國

老古閣朝鮮之戰の要討話

瀬川采女が妻女書と朝鮮へ送る國

石田増田大谷が朝鮮に参る國

吾れを燒る國

倭元道遠君に相見して三成が

吾れを述る國

晋州城合戦話

日 國

後及又去清鞞韞車と作る國

晋州城陥落の國

明兵部圖話

右長沈惟毅と罵る圖

右圖名護屋陣中用机圖話

日圖 二番

後及去清菅上之助斬虎話

日圖

卷之十一

名護屋陣中軍陣定話

豊左衛門朝神が浪涛と怒り給ふ圖

隈若尾清門梅心を判教以圖

拾君誕生話

日圖

信正軍少又怒らざる圖

田代の役者信正が敵方

陣押と見せ給ふ圖

虎と名護屋へ牽来る圖

右圖伏見の築城話

伏見の城松の丸の圖

右圖芥子花見話

日圖

月景

急雨雷電を岡山とりの給ふ圖

卷之十二

園白秀次公幼少活

如炊園白殿下傳りたる園

石田三成智論園白活

渡若殿下(英女と送り給ふ園

秀次公波石極本屋女活

日園

秀次公花見の園

秀次公厨人又砂を喰ひ園

益后法印の女の手と給ふ園

秀次公悪少活

賢者退き不賢者進む園

秀次公比叡山より狼藉の園

本村常隆女謀奉討る園活

本村常隆女侍りの城(五つ入園

西雄奇を獲る園

總目録終

加藤肥後守從四位侍從藤原清正公出陣之像
法諱淨池院殿永運日乘大居士
慶長十六年辛亥六月二十四日卒時年五十歲



上三馬
有如九

九本馬蘭金鏡板黑文字銀

朝鮮國王李昭呈書豐太閣稱清正德威其文曰

主計清正自壬辰年踐境以來不貪利欲不快庸雜為奉
王事實心丈夫之威也真可謂君子中君子也以壯畧武
勇觀之則雖良平信噲何足比肩以克已復禮轉愛寬洪
籌之則雖吞蛭割股之仁何能及乎非凡夫庸人負故使
山僧釋歲密投其陣秘闕清正像容移繪絹廟堂營作王
城南大門外蓮池岸掛幅位以牲物祭尊生祠王子親祝
祭文高官三人司之治事春秋兩等也若疑斯文則馳使
點檢亦明垂貴國忠臣名將錄幸甚

朝鮮國臣禮曹司李榮春敬白

肥後國飯田郡中尾發星山本妙寺為什物每歲秋七月以虫拂之時許拜見

繪本左圖記六篇卷之五

目錄

殿下將三河吉良話

孝臣殿下將場幸陣乃圖

兵士等之中又獵とる圖

雪中紋獲の圖

孝臣殿下攻洛北圖

殿下波右利休之女話

殿下赤ふの花拵の圖

波右利休を捲く図



其頁已下不用卷一

利休茶釜の彩古と目利して價を定る國

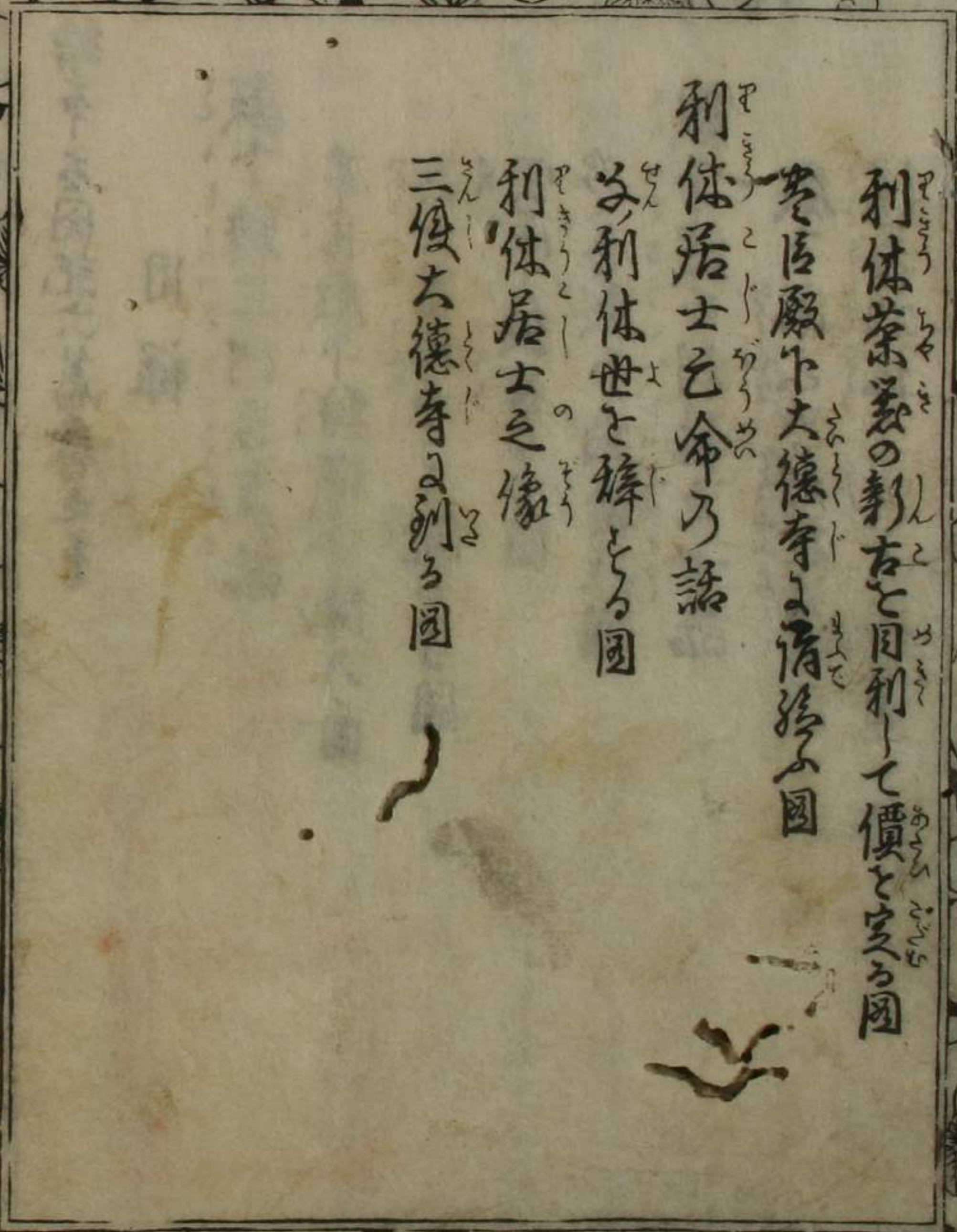
老臣殿下大徳寺に清徳の國

利休居士亡命の語

又利休世と稱する國

利休居士之像

三俊大徳寺に列る國



繪本右衛門記六篇卷之三

殿下將三河吉良

豊臣國白秀吉公教奉の武徳海内は廣き國なり人牧和風を以て
臣と稱し後いざる若し是と討てて之は其制征のともやうなるたふの
たれ就ぐとく佛陀にして執く是と樂んがれは毛利志摩國大友之
花龍苑有長為我部達南都をにじりてしと旧家の諸侯悉く
老臣の旗下に属し今年天正十八年春の方小桑氏政滅その後
五畿七道に國九州名入り跡き清く浦くよまをて榮れよれは
びきとしり百余年の戦國麻と乱せし世の中折にしと忽ち利休
なる御代と傳ししと百姓花と春と其女とよ最老臣の御世に
てぞ御代と傳し其奉の冬十一月殿下秀吉三河の吉良を將し其



真蹟記六卷用

豊臣殿狩場本陣之図



真蹟記八卷用





雲中
 放鷹
 乃
 園

真顯記六卷

故阜中納言秀信御丹波中納言秀勝御と石具せりし河伏の福
 徳丸湯門をまじ則斤切市正且元加原丸馬女起秋小早川丸湯門
 系長曾我部宮内少輔元親増田右湯門村長遠冬とにせりし系
 乃武士と下六万余人思ひくは壽羅を飾白雲の踏で三河國へ越さ
 路へ今日の沖出馬こそ家と忘れ妻子と忘るる軍陣の出まはれ
 心二條同定るを地して洛中洛外の僧俗男女道左近國の百姓京八通
 の乃にまらび出其車馬の音とば羽籠の角と見く飲く枕と相在い庶幾
 五殿下一万の歳の聲と保り承く田獵如く終てとるる又祀りたる也や
 或し樂と何ぼうとる有樂の御則かりたること出度りたるのみとあり
 其十二月都より終りたる小將獲終りたる歎大とるく小となくとも竿
 ようけ終りたるはとくく系中と二つは終りせよ吉云の御輿に石れ若後

の流土の歩郎して皆も毎々舞と居居樂乃亭に入りて終るを初終
 二番くまじを始り終りし宮子留女提家清元の家門終り終りて
 奉とるるふん物終り終りて系中又集り舞となれ老若市れに次の日
 竿よのけ終りたる歎をまららしと云御殿と人下り洛中の町人まで
 終り終りて目物度河代の例るるとよ下終り終りたるね

殿下波石利休之女

百参乃大宮人なりと傳あれや極はしてたりし洛中洛外の百姓
 園き夜更中の中向らぬぬるにすく一を極は極をまらひて終り
 まて揚美妃相が谷方人との区揚美の咲わたり路の末は終り
 地との極知恩教長樂寺西の河室荒らそ外遊き洛中此社
 らぬとくし震よありはたの色とく小見は「雅」と風情なり小若居殿下



乃の 殿 殿 殿

真言宗 卷一

の威感きく響きと後日二歳七とせが後日都のりりけ于長の幸い止むい
 年毎のま花の比まろれた時「き打群」つう「橋」も眼深せぬる今
 年春二月の末殿下秀吉云南後守は清で治ひ雲三長老も初回
 けて後燃し治るるれとてれ花咲乱とてをいそふ心なく御流じとて
 治るるんく南後守よりと源乃る瓜思若の方へ御車と遣すは安し
 これ本の同様の落ぶ幕引まほし酒の「小寺」祝入り貞ありげは長閑や
 宴は年のやと二十七公よりと見あつ女房をこくとれりひ乃麻子ひ々
 せうる波は白き練装のと「臣」して中郡は破籠やうれれのとおせら
 り花打泳めつて「静」歩も「妻」しは殿下の先驅は移さあひは
 くたの本は落まきうと「り」が「ん」うり方く「静」く「り」てやるり
 殿下も御車乃「簾」押とく「泳」め治るは彼女房神とて「面」を「覆」ひ

たりとま何と申し人御見知りぬ女方りりれとれは「准」も思ひ出治り
 比は「丁」ぶらう御車乃「ゆ」るとれらる小殿下「近習」の若とらとそに花の
 後「隠」れう女こそ我見えぬ若るれは「准」を「ん」志れり何若のほま
 たりと受く「糸」りはと「ゆ」れは「長」りて「妻」り殿下の「見」同治るは「ゆ」の
 むどま「り」女止りはと「ゆ」りりれは彼女房大は「思」れ「平」伏して「ゆ」を「結」つ
 近習の士も「あ」て「あ」くくと「ゆ」れは「平」利休が女百雀を宗女「妻」りて
 いちり「治」けて「ま」ゆりかくと申と「せ」れは殿下の「ゆ」おせ治り「利」休が
 娘方りりりこそ「ま」り「ま」るる「治」で「あ」れれは御車治り「身」は
 んで「治」り「治」る「ま」に「文」悪のまごい男女の「情」に「し」は「流」の「ま」るる
 利休の娘の「顔」も「心」研るが「あ」らうと「治」る「政」不の御車「回」りて「治」る
 登の中「美」せし「ゆ」と「あ」らうと「思」ひ「あ」せられ「志」も「無」治る「あ」らうと



殿下
の
車
の
花
の
園

真蹟記六篇卷一

猶蒙書信を授せ給ふは百董屋宗安の進言に身まうりて今の猶も侍の
申すべし女が方へ恨を給ふ宮仕せよしと強て相會あらしむとも
まは後といひて悲し乃涙うらひ御もははくも御もそく人い借を出入
いはひく釋して後いせしけし時天正十八年春三月朔日御東
征伐りたれ小田原軍勢と御殿下り日八日都と出馬し給ひ園東
強き給へ何れも其後よおるぬけ以政不有居居の城渡和たはし産
ろが通て政不乃御方渡り御方とつひとかく堂と借ひし奥の女中
三條友加登松の丸友とにちりし事と此婢女はつろと京と大坂よ
別別と双方より同着を入悲ひの着と入込せ心程の難日くよ止其威
勢の御方渡若乃御方勝も事と政不の御方と教て唯依は附は
何着く御身よ入りく政不渡若の面女御軍と殿下の利休が娘を

石れつるすべしと洋よ授せ給ひ政不乃若いことし百合の若の命の
利休が娘と疑ひ思召せしは得時と流く過瀬を御りしれは若南よこ
えんを給御氣をとり又給ひども三條の若おるの方々と利休が娘
と悪し給ふは悲飲のどく又の利休ととせいんやとつひと御思召つる
よ今度殿下の御を御り出されぬるとは給ひく三條友加登御心は
百億一余の女おるんは幾百人おるとも又は御心と公は利休
が女一人の我身死してはとせまじと政不中合はは志の人中
せ殿下の御國と給給ふは渡若の御方の利休が娘は御悪しと
多し御御例進く石出され御難事と事御り百合の御御殿下の
御身入りやせん事と百を給ふの力い支つて止めきんんそし給の
丸の若と密は合されたる日奉八月在國悉く平らぎ奉若と凱歌と



後入
後君
初集
七

言八
卷一



利本
 茶
 新古今
 して價
 定る圖

真蹟託六篇卷

沖嗚り霞のやと柳うらやと物と折の吹雪の雪の去折よ
 積る葉も春を去る時と葉防まらばはれしと羅と同色しと宮の
 くるま年のま殿下利体が娘と東とて見ゆひを後軍勢のつと
 まるくお忘れと押ししころがけ附見國思し出せらるる葉落城の
 終い利体は海へ身をまて海が娘顔容多あり宮はまじし出たは
 と殿は命のう不利体沖着ややういおむる女君の沖境は止りし
 こころの沖波却て悲となりはけ女元来百雀屋乃葉へ嫁しは愛
 まで後とて以来い人の命をうろくこれかたはあかりはんとこの志
 さいと葉とあぐやとめ安んむじのぶくゆくと心いんや瓦の
 中におぬり終る命に終い卑賤の身と願ひ宮は葉とせはた
 うは心とて殿下の沖呵りと受るのころは海海真と見はしや

だしと寛仁の沖歩いをひて集が思かる操は金としはつんこそ
 なるうらやの斗の沖悲と悲と悲ひなるよやて放てる命に海
 ひは利体が不ぬ娘と商物より富貴と得たりと云ふんが口
 端しとの葉こそ殿下け言ははしる甚怒り終い既乃移より是乃
 血先まぐ我思にむさるなるまよる礼の返言弄懐の次分は坊まめ
 が首と斬んは何の難きややあんと宮へ三条の表は礼打とや海に
 ぐん始とてさうの礼の中の人乃唱へとばはらふ不利体居まは端よ
 云家およと石礼失信し私怨と構ては葉葉乃同利は後帖ま
 己と親しむ者の持来の彩きと舊しと云似假物とて心まをりて
 定り終る跡き人の抱は好む悪きと聚まなるを礼のりし
 を價とぬらうははぬる危くはし人を沈して利を得るの集



とよき
冬
殿下
大徳寺
消で
國

真蹟記六帖卷二

十四

此の如くは... 後と... 僧と... 山門の... 大徳寺... 僧と... 山...

門の... 僧と... 山門の... 大徳寺... 僧と... 山...



見たり
千利休
世を辞
と何
園

真言宗の繪巻

十一

とそ後瑞光給鳴の要く宗易又之藏人といひてる五十六
年秀吉云茶礼は長き者教人を養はして細位に居し
終る宗易一人乞と辭し居士の福瓜法有る秀吉云大徳寺の
長老宗陳和尚に命じ利休居士の号授し其後秀吉云
乃とく宗易を遣はし終るより世の人教て抄るそふと云
時二月廿日殿中武士は終る利休と捕へし三條河原に殊
し終る利休より殿中の御氣色にたがひつゝ命の
重なる御氣色の物ごとをれくよ終り遣り今朝に教書屋の
御氣色と云うけ宗廟と云ふ門人の茶瓜点とせざる命御氣配
の武士利休が居るを之を困らぬ命と讀て利休と僧尼利休茶
と云終りては茶瓜屋に今より御用の物りてを屋に扱打置

うり拜世あり曰く

人生七十 力圖希咄 吾這宝剣 祖佛共殺

終るまがえ具足乃いひて門を力今は時を去るるげん

時天正元年二月二十日方り

秀吉語曰く小易が首と一糸及指の下の糸に被本像と掲
げてその首と鑑りて相とみてこれと夾立る教日觀者市のこ
としん

殿中應惠多宰相多 和河忠伸徳吉院法印等
を命合られ大徳寺と被却し古溪和尚と終るを
取り兵と引つゝ無常野より宗陳及び教書の長老と
又被古溪和尚宗陳の南寺乃被却我書の取をるる

とそよよせりくまらぬ短剣と懐に隠し持陳淋する旨安き心自
 元を費さく人の心結るるに辭元壯然にして衆僧之徒
 出く命と成る徳若流日今度千利休が儒上より荷擔し渠が
 像と山門より委ぬりてを時つぐる糸言語を断之像而由山を
 破却し宗陳が肩より受たれその嚴命なり純とて陳附とれ
 能くしる糸言語はしく云とて遂寺破却の儀は不見して中室へ
 しこやせんか衆長老皆敬重して其厚きを懐ひぬ附吉溪
 和尙は坐すは抑天地の根あり万物の一体之吾親成よ
 其佛一如と云くまきりかき結きりぬ千宗易先の居士乃
 号と拙僧と受て附附は世と辭するをて自像と他つて嵩山
 又其凡九人死していつて下ま佛のいふ其靈牌を没け佛殿を

利休居士之像



利休居士之像

